

制服とポップカルチャー

佐々木隆

プロローグ

日本は一種制服文化があちこちに流布している社会と言ってもいいだろう。学校を始め、職業においても制服を採用しているところは多くある。制服を廃止して私服対応のところもある。ここでは特に学校、特に女子高校に焦点を当ててファッションとの関連性を含めて「制服とポップカルチャー」について考察する。

一 学校教育と制服

日本の欧米化の時代と日本の教育制度の確立の時期を女子の制服という観点に絞って先ず見ておきたい。明治時代における日本の欧米化の象徴はジ

ョサイア・コンドル設計による鹿鳴館が一八八三年に完成したことだろう。難波知子『学校制服の文化史』日本の近代における女子生徒服装の変遷』（創元社、二〇二二年二月）でも次のように述べている。

鹿鳴館の落成以降、夜会での女性の洋装率は急速に上昇していったが、一八八七年（明治二〇）年を過ぎる頃から下降をみせ始める。（二）

鹿鳴館の完成後に女性の洋装についてはふたつのことに注目しておきたい。同じように難波は次のように指摘している。

女性の服制が公家装束である桂袴から洋服に転換したのは、一八八六（明治一九）年六月二三日である。伊藤博文首相兼宮内大臣から以下のような内達が下された。（三）

そしてもう一つは昭憲皇太后から出された思召書である。

女性の洋服着用を正当化し推奨するために、一八八七(明治二〇)年一月に皇后から「婦人服制のことについての思召書」が出された。(三)

しかし、これで女性の洋服着用が定着したわけではなかった。教育界で注目すべきことは内田静枝編『セーラー服と女学生 100年ずっと愛された、その秘密』(河出書房新社、二〇一八年三月)のよれば次の通りである。

キリスト教系ミッションスクール、官立、私立と、それぞれ特色のある教育方針のもと学校運営がなされましたが、一八九九年(明治三二)に

高等女学校令が公布されたことで制度化も進み、都道府県には最低一校の高等女学校の設置が義務づけられるなど、学校数も増えていきました。

(四)

社会全体としても女性の洋服着用はなかなか進まなかった。

二 女子の制服

女学生の誕生により服装の問題が生じて来た。内田は当時の女子の制服について次のように述べている。

男性用の袴のように右脚と左脚とに分かれておらず、筒のようなスカート状になっている女袴は華族女学校の下田歌子が考案したと伝えられ

ています。(五)

内田によれば「日本の女学校にセーラー服学生服がもたらされたのは一九二〇年(大正九)頃といわれています」(六)とある。金城学院(名古屋市)、福岡女学院(福岡市)、平安女学院(京都市)にその写真が残されているという。

制服、特に女子の制服については学校の有り様とも大きく関係している。

また、通学服の洋装化が一般化してきた契機として「一九一九(大正八)の山脇高等女学校(現・山脇学園)を皮切りとして徐々に進められました」(七)とある。

ではどうしてセーラー服だったのかは気になるところだ。内田によれば福岡女学院のセーラー服導入の経緯次の通りである。

福岡女学院のセーラー服は一九二二年(大正一〇)に、女性宣教師であるエリザベス・リー校長自らが指揮をとって作ったものだそうです。その動機は日本の生徒たちと仲良くなりたいためでした。(八)

制服に教育的な意味合いはないということだ。むしろ生徒と仲良くなりたというのは、多感な女子学生に興味・関心を持つてもらうことがその背後にあると考えられる。田中智志『教育学がわかる事典』(二〇〇三)によれば、「このセーラー服は、一九二〇年代に日本高等女学校の体操服として使われるようになった」一九三〇年代にセーラー服は、高等女学校の通学服として使われるようになった」(九)として指摘している。

三 戦後の女子校生の制服

戦後の制服について田中智志『教育学がわかる事典』(二〇〇三)では次のように述べている。

一九五〇年代から七〇年代にかけて、女子高の制服の主流は、セーラー服からブレザータイプのものに変ったが、一九八五年以降、デザイナーズ・ブランドの制服が注目を集め、全国規模の制服のモデルチェンジがおこなわれるなかで、セーラー服も復活をとげた。⁽¹⁾

セーラー服が敬遠された時期がある。小林哲夫『学校制服とは何か その歴史と思想』(二〇二〇)では次のように指摘している。

一九七〇年代になると、セーラー服に逆風が吹く。「スケバン」と呼ばれる女子高の出現、女子高生

が売春で捕まった時の週刊誌のコラーージュはセーラー服が使用された。⁽²⁾

エンタメなどでセーラー服がどのように扱われていたかを簡単に見ておきたい。

赤川次郎『セーラー服と機関銃』(主婦と生活社、

一九七八年十二月)

相米慎二監督『セーラー服と機関銃』(一九八

一年) ※主演・薬師丸ひろ子

那須博之監督『セーラー服 百合族』(一九八三)

『スケバン刑事』(テレビドラマシリーズ化、一

九八五年)

おニヤン子クラブ、テレビ番組『夕やけニヤンニ

ヤン』(一九八五〜一九八七年)に出演。デビ

ュー曲『セーラー服を脱がさないで』

武内直子原作『美少女戦士セーラーMoon』(一

九九二年、テレビアニメ)

制服、特に女子高生への制服が注目されるようになったのは、イラストレーターで制服研究者でもある森伸之『東京女子高制服図鑑』（河出興産、一九八五年七月）の影響が大きい。小林哲夫『学校制服とは何か その歴史と思想』（二〇二〇）では次のように述べている。

一九八五年、森氏は『東京女子高制服図鑑』を刊行した。都内の高校の女子制服をイラストで紹介する内容は中学や高校の受験生、学校関係者（経営者、教員）に大きな影響を与えた。これまで受験情報として学校ごとに制服を並べた本はなかったからだ。受験生は制服の「かわいい」ところに注目した。学校関係者は他学校の新しさ、斬新さを学んだ。(十二)

小林はさらに次の様に述べている。

制服の役割が進化していく。多様化といってもいい。
デザインは洗練され、「かわいい」と喜ばれる。
アイドルグループのコスチュームみたいで着るだけで楽しい。(十三)

「制服は管理、統率、抑圧」の象徴(十四)という性格があるが、限られた三年間という時期を女子高生たちは楽しむことを忘れていない。学校は学校で制服のモデルチェンジをイメージアップに利用していることは明らかだ。これは学生募集との関係が大きい。教育内容の充実を広報するよりも、制服のモデルチェンジは視覚的に大きな影響を持っている。女子にとって制服は日常的に着用するだけにファ

ツシヨンとしてとらえようとするのが現在の風潮である。聖橋諒「女子高研究の思い出」(一九八五)では「学校もブランドの時代といわれる」(註五)制服デイズニーなる言葉まで誕生している。鈴木朋子「若者はなぜ「制服」でデイズニーに行くのか」(二〇二三)で次のように説明している。

「制服で遊びに行く」というのはZ世代の女子高生にとっては当たり前のように、休日でも制服を着て、若者が集まるスポットでスイーツを食べたり、プリントシール機で写真を撮ったりしています。

特にメジャーなのが、制服で東京デイズニーリゾートへ遊びに行く、いわゆる「制服デイズニー」です。若者が東京デイズニーリゾートに行く際、何を着て行くかは重要なポイント。「一緒に行く人とバラバラの服装なんてありえない」と語るく

らいで、事前にお揃いのトレーナーやスカートを購入して東京デイズニーリゾートへ挑みます。カップルも「カップルコーデ」(ペアルック)で出かけます。

その中でも人気が高い服装が制服なのです。二〇二三年、東京デイズニーリゾートでは、学生を対象とした一ヶ月限定の割引チケット「キャンパスデーパスポート」(通称：春キャン)が3年ぶりに復活しました。春キャンCMでも、出演者は全員制服です。

制服デイズニーという言葉が初めてメディアに出たのは二〇〇八年頃。かれこれ一五年近く、若者達は制服で東京デイズニーリゾートに出かけているのです。

制服デイズニーは現役の中高生だけでなく、大学生二〇代の人にも楽しんでいます。自分が高校時代に着ていた制服を着る人が多いものの、制服を

すでに処分している人や自分好みの制服ではなかったという人もいます。その場合は、可愛い制服を調達しなければなりません。(一六)

女子高生は限られた時間を積極的に楽しもうとする姿勢が見られる。

エピソード

難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』(二〇一二)でも指摘しているが、女性生徒の制服も様々な見方がある。

時代や社会状況の変化のなかで、女子生徒の服装に国家の思惑、学校の教育方針、女子生徒の判断や行動、保護者の要望、地域住民のまなざし、メディアや世論の反応など様々な影響が複雑に

絡み合い、女子学校制服は価値観の衝突や揺らぎを抱え込みながら成り立ってきたといえる。(一七)

制服は学校が定めるものだが、それを着用するのは生徒だ。制服に憧れてその高校に入ろうとする志願者もいる。自分を可愛くみせたい女子高生と生徒募集に活用したい学校の思惑が入り乱れているのが制服だ。制服をめぐる論争は単なる教育面だけで論じることとはできない。ポップカルチャー溢れる社会の中で生きる女子高生を無視することはできない。女子高生にとって制服もまたファッションのひとつなのである。

注

(一) 難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』(創元社、

二〇二二年二月)、二五頁

(二) 前掲書、三五頁。

(三) 前掲書、二七頁。

(四) 内田静枝編『セーラー服と女学生 100年ずっと愛された、その秘密』(河出書房新社、二〇一八年三月)、二〇頁。

(五) 前掲書、三一頁。

(六) 前掲書、六頁。

(七) 前掲書、九頁。

(八) 前掲書、六九頁。

(九) 田中智志『教育学がわかる事典』(日本実業出版社、二〇〇三年五月)、三〇〜三一頁

(十) 前掲書、三二頁。

(十一) 小林哲夫『学校制服とは何か その歴史と思想』(朝日新聞出版、二〇二〇年一〇月)、二四二頁。

(十二) 前掲書、三四頁。

(十三) 前掲書、二三八頁。

(十四) 前掲書、二三九頁

(十五) 聖橋諒「女子高研究の思い出」(一九

八五)「学校もブランドの時代といわれる」

森伸之『東京女子高制服図鑑』(弓立社、一九八五年七月)、二〇三頁。

(十六) 鈴木朋子「若者はなぜ「制服」でデイズニーに行くのか」

<https://www.watch.impress.co.jp/docs/topic/1483006.html>。(二〇二四年十月六日アクセス)

(十七) 難波知子『学校制服の文化史 日本の近代における女子生徒服装の変遷』、三二二

五頁。